

で年に二人ぐらいつつ、くじ引きで当たった人が御参りしたものです。今のよう交通の便がなく、道も悪いしで、でも其の頃の方が有難かったように思います。

お里回りも思い出の一つで十月二十七・二十八・二十九日がお宮入りで、このへんには二十七日にこられ、次々にかたでかついでこられ「ぴいひよろ、ぴいひよろ」「もう音がする、ほら見えた」と、おがみに行ったものです。かならず赤飯を作り、家の神様仏様に上げること、を自分は今でもしているけれど、其の頃はさとうきびとか、あおし柿とか、売りに来られ、それを買うのが又楽しみの一つだった。

兄が比木神社がこられると焼酎一升供えてたので、私も兄のあとを継いで、毎年お供えています。

清き流れのままに

坂本 猪股 松雄

一、天地あめつちのまにまに田植終わりしを神の御陰みとてほぎ祀りけり

二、さなぶりの宴うたげに祖父母の袖引きて「歸らふ」と泣きし吾が大正期

三、秋祭りに出店並びて客呼べば飴と風船玉を買ひぬ祖父母と

四、日曜の朝は神域清掃のならわし継ぎし吾等学童期

五、産土うぶすなの森なす巨木の椋の実を拾い喰いせし吾が学童期

六、御社みの巨木石韋ひとつばの垂枝の鞆鞆ぶらんこ遊びは順番なりき

七、改まる御代みよ明け初めし御大典みまつりをことほぎまつりき津々浦々に

八、村あげて我や日向の民草たみくさぞ昭和を祝賀ことほぎた
てまつらばや

九、神武船出の面影すがたを披露せし先達の御即位およつぎ寿
ぎし直心ひたこころかも

十、綱曳きて田植なりせば元綱は小学生のわが
仕事にて

十一、川の辺に水神祀るとて笛、太鼓のぼりおし立
てし列長かりき

十二、水神のみ祭り終へて花笠をかむり廻せしわ
れら弱年期

十三、三社参りの鵜戸参道の飴売り（娘）に捕ら
わりしわれやうぶの思春期

十四、貰ひ風呂の家主の娘が焚きながら水注ぎく
れし思春期二人

十五、朝まだき男女七名連れだちて日の出の尾彦
山に栗拾いける

十六、敗戦に神霊みたまあらびてか嵐襲しけおそい神域もろと

も人家毀こぼちぬ

十七、明治より大正、昭和、平成と郷里むらのきめご
といまに承うけ継ぐ

記 平成六年長月

御稻荷様の由来

牛牧 菊地 富久子

牛牧の中央部に米良の御稻荷様の分院と伝えら
れる御稻荷様があります。

言い傳えに依りますと昔は神様方が集まられて
楽しい遊び場所だったそうで又願ひ事は一つは必
ず叶えて下さる大神様とも聞きました。境内には
大人四人で廻し切れない程の杉の御神木が三本そ
びえ立って神々しいお社でした。春と秋の大祭に
は赤飯やおすしのおにぎりを戴き楽しかった子供



の頃が浮かんできます。

小高い丘や山に登れば一面に牛牧の大地が広がり「其処は誰々さんのお家だなあ」私の家は其処だと素晴らしい一円でした。

その三本の御神木は牛牧のシンボルとして何処から眺めても雄大な姿でした。

御神木の歴史ははっきり分かりませんが残念乍ら終戦後の台風で三本の御神木も一夜の嵐に三方に倒れ淋しい思いでした。

その頃小さい椎の小枝が一本ぽつんと淋しく残っていましたが戦後五十年が過ぎ椎の小枝もいつの日か見上げる御神木に成って椎の実が落ち鳥達の止り木ともなり夏の暑い日々には人馬の涼しい休み場所となり一息出来たものです。

想い出深き椎の御神木も平成五年九月の台風で横倒しに倒れました。

あの雄大な椎の御神木は御社や近くの人家に被

害なく思い出深き御稻荷様でした。

コックリさん遊び

蚊口下 上村 テル子

私達が生まれたのは大正の中頃でした。テレビもラジオも無い時代でしたのでお金をつかわないで出来るあそび娯楽とでも申しましょうか。其の内容は昔は和服を着ていました。其の生地を反物と言って一枚つつ油紙でくるんで有ったので其の紙を利用するのです。いろはの文字を書き一二三と数字年月日も書いて五、六人集まって竹三本筆ぐらいのものを中より上をひもで縛り二人ぐらいで便所に行くのです。其の頃は太抵の家が住家と別に小さな屋根の家でした。夜は一寸と淋しいのです。「コックリさんコックリさん誰さんの家で見

んな待っていますのでどうぞ来てください。」とお願ひしてみんなのいる所にもどるのです。二人が向かい合つて竹の棒をかかえるのです。だれかがうかがいたい事をたづねるのです。二人で持った竹の棒が字の上を何べんかまわつて言葉のおとり字の所に来ると棒がちゃんちよんとおさえたところをみなでよむのです。誰さんはいつごろお嫁に行くかとか誰君は頭がいいから何に成るかと言うようないろいろな質問が出て色々な答えが出るので大へんおもしろい遊びでした。今、思えばおがみやさんゴッコだったんでしょうコックリさんは便所の神様だったと思ひ込んでいたような時代だったのでしょう。今の子供さん方には恥ずかしい話です。

民主選挙のはじまり

持田 岩 佐 政 雄

終戦直後の昭和二十一年高鍋東小学校長に東京高師付属小から隅江信光先生が着任された。

前年の台風で校舎は一部倒れ、衣食住は極端に乏しい時代であったし、進駐軍の統制のもと教科書を初め、教職員に厳しい指導が続いた。

初等科、高等科合わせて一九三〇名、職員四十五名、副校長もおられるマンモス校であった。

翌二十二年四月三十日戦後初の男女平等の県会議員の選挙が行われた。当時は現職のまま立候補ができ隅江校長が敢然と名のりを挙げられた。直ちに職員会で、どう戦うか論議され、本部及び各学年単位で選挙活動することになった。投票日まで十日間（？）授業を終えると自転車に拡声機と候補者名の幟を立て、各学年毎に校外に出て街

頭演説をした。「この荒廃した日本を立て直すには、隅江候補が最適任者であります。先生は日本



有数の地理学者で豊富な知識と決断力は必ず日本再建に大きい力になります。先生は選挙後は、候補者は「井戸堀が残るのみ」と申されています。本当の民主選挙は「贈らない、求めない、受け取らない。」の選挙で私財を投げ出して、清潔な選

挙活動をしておられます。」と、先生たちの街頭演説には父母はすぐ集まり熱心に聞いてくださったし、隅々までハンドマイクも使って清き一票を呼びかけた。

放課後毎日知恵を出し合って演説内容の検討をし暗くなるまで誠心誠意の活動は、三十二歳の若き教師時代の忘れ難い思い出である。

特に前日は、三輪トラックを借り荷台に椅子四脚を向い合って並べ、隅江候補夫妻と戸田先生と私の四人で必勝を期して東見湯をマイクと肉声で呼びかけた。そのため三日間声が全くでなかった。当時は校長も職員も全員が組合員であり、見湯定員六名の中で最高点で当選された。現職のまま県議会に出られ、翌年には出身地の川南小学校長に転勤されたが次回も当選され、戦後の混乱期に大活躍をされた。

後任に大岩根清校長四年、後任に荻原光治校長

が着任され、三年後には、教職員のたつての願いで県教組委員長に就任、現職を去られたが後に県議として三期、教職員の結集した力で当選され県政に尽力された。占領下の乏しい時代だったが、心の通う温かい、あのゆとりが懐かしい。

お国に捧げた青春

麓江 田村 克 豊

私達の年代は、夢多き青春を、国策遂行上お国へ捧げたものである。

昭和十一年より、昭和十九年八月七日まで、日支事変。第二次世界大戦と国策遂行に全力を傾注したものである。不幸にして、結果は徒労に終わったがこれも運命であらう。

而し乍ら、国民が一体となり、国家再建を合言

葉に精魂を傾けた成果は、今日の経済国家を為しとげたその良し悪しは別として驚きである。

今、戦後五十年を振りかえると、さまざまな出来事が走馬燈のように錯綜する。

平和な高鍋に空爆を受けるとは御伽話にでるようなことである。

私は昭和十八年結婚。世帯道具は一切なし、配給を受けたのは、素焼きの鍋、ハガマで使い方が悪いと破損する品物で二度と配給はなかった。

私は当時大阪勤務で炊飯するのにガスはなし燃料に苦労したものである、道路上に落ちている紙等を集め炊飯したものである。亦汽車の枕木を盗み急場をしのいだものである。

昭和二十年になり大阪方面の空襲が頻繁となり、都市機能が完全にまひとなり、無人の大阪となったので三月高鍋へ引揚げ待機することになった。

当時の高鍋も空爆で安住の地でなく防空壕生活

であった。

八月に入り空爆が頻繁となった。特に蓑江地区はヒバリ山より低空で進入し機銃弾を受け安住の地ではなかった。当時広島、長崎の空爆は殺人光線を使用したとの風評があり、其の防ぎ方を相談研究したのである。幸いにして蓑江地区では人的被害はなく、終戦を迎え安堵した状況であった。

私は台湾関係が終戦と同時に連絡不能となったので、十月一日付で、児湯地方事務所経済課に転職し、軍放物資の配給業務を担当し時期的物資欠乏の時であるだけに苦労したものである。特に食塩の欠乏は、日常生活に欠くことの出来ない物資だけに困惑した専売品であり乍ら塩の貯えはなく専売局は打つ手がなかったようである。

果ては塩の自給を図る為自給製塩を勧奨することになり、海岸沿線は塩つくりで、海岸の防風林の松も燃料となり営林署より苦情があったようで

ある。児湯地区の山間地区は欠乏がひどく配給も全くなしの状況であったので新富町の江梅瀬に塩田構築のため四国の専門職を雇い、製塩事業を行ったものである。

以上過去を振り返り回顧するとき、夢の世界をさまよっているような人生であった。

渡 鮮

羽根田 三 嶋 敏

大正十三年四月、祖父と共に渡鮮しました。今を遡る七十年前のことです。

当時、満州には、張作霖という軍閥が覇を唱えて居り、部下の郭松齡の反乱があつて満州の曠野は殺伐の風が吹き荒れていました。

私共は釜山港に上陸すると、朝鮮鉄道で北上し、真新しい国境の街、新義州に降り立ちました。対

岸は、満州の丹東（当時の安東市）新義州とは、鉄橋で結ばれています。流石に北緯四十度、吹く風も冷たく、遠く眺める白馬山は山頂に白雪が残っています。

新義州の街は前年義州から道庁が移って来たばかり、道は広々と、区画は整然と、道路の両側には除雪された雪が整然と積まれていました。

これから四里二十九丁の道を北之義州に向かいます。約一時間で目的地に着くと、昔ながらの中国式城門が厳然と建って居り、屋根に掲げられた扁額には「海東第一関」「壯邊樓」と見事な筆蹟で大書されています。

南門には両親と妹が迎いに来ていました。この西北の高台には、統軍亭という美しい建物がそびえています。この統軍亭の下を鴨緑江が悠然と流れて居り、近くから虎山、九連城と続き、はるかに遠く鳳凰山は霞んで見えます。

鴨緑江は、氷が解けて、次々と白い氷塊が下流へと流れていました。

鴨緑江

朝鮮半島の北、西部、両江道が中国に接するあたり、標高二千七百四十メートルの白頭山から湧出した川は、北に流れて松花江の源流となり、東は豆満江（図們江）が日本海に注ぎ、西は鴨緑江が山々谷々の険しい中を、はるばる流れて黄河に流れこみますが、上流は両江道の原始林を伐り出して筏を組み、はるばると新義州は、王子製紙のパルプ工場へ、中流は農産物（大豆等）を船で安東の製油工場その他へと搬んで行きました。

慈江道

慈江道は古くから拓けた歴史的にも由緒ある都邑があり、また、この地方は、古くから美しい姑娘（中国語で娘・若い女）が輩出したことでも知られています。

西峰には「ダム」があり、プロペラ船の終着地は満浦でした。

謂原、楚山、熙川、中江、前川、慈城、江界の各都市があり中心都市は江界でした。

平安北道

両江道、慈江道が分離して、平安北道は昔の三分の一の廣さになっていました。

これが鴨緑江の下流地域になり、碧潼、昌城、朔州、北鎮、寧辺、博川、亀城、定州、宣川、鉄山、義州、龍川などの都市があり、寧辺は最近、原子研究所問題で世界の注目を蒐めておりますが、ここには又「トウリュ」窟という大きな鍾乳洞のあることでも知られております。

義州は古くから平安道の中心で、昔は龍灣とも呼ばれて中国との交易も早くから行われておりました。

京義線、安泰線の連結、平安北道庁の新義州移

転により昔の面影は薄くなりました。

こうした朝鮮に、あるいは台湾に、将又満州にと、私共の時代は海外に進出して、政治、経済、開発、治安といった、あらゆる面に、指導的立場にあって精励されたものであります。昭和二十年八月終戦となり、政府機能は全く止まってしまいました。私共邦人は、治安におびえながら、引揚げのために、先を急ぐ者、あるいは家族を捜し求めて後戻りする者、右往左往で、くもの巣を散らしたような大混乱に陥りましたが、お互いに助け合い、お互いで組織づくりをして、大混乱の中をつつがなく、祖国に辿り着くことが出来て、人生半ばにして、第二の人生を踏出し、終戦後の激動と変動の中を生き抜き、今日に至りましたことを願いますとき、実に感慨深いものでございます。

小丸川の釣り懐古

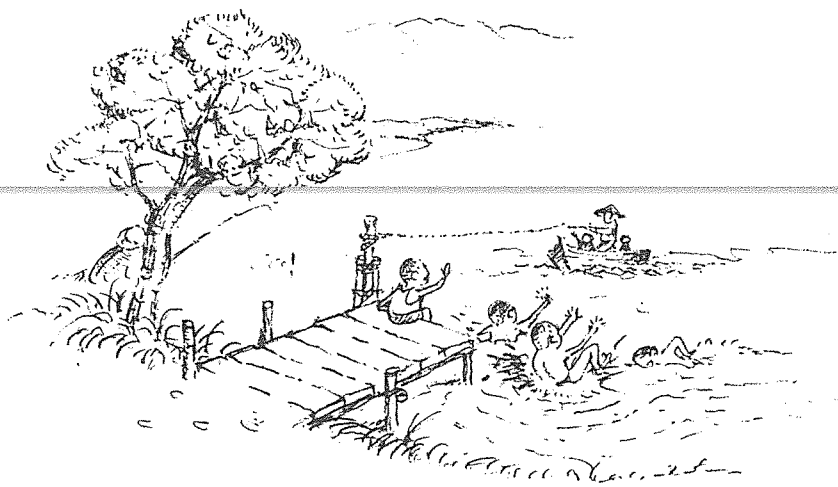
川田 一 廣 長 正

昭和の始め頃の小丸川は、文字通りの清流で水量も豊富であった。また、今の潜水橋の下の方に筒井の渡し、青木下に橘の渡しがあり、川の両岸に鉄線を張り、それをつたって兩岸を往来し、のどかな風景であった。子供達にとっては、いい遊び場であり、また、釣り人にとってもこの上もない、釣り場でもあった。

子供の頃、夏泳ぎに行き、のどが乾くと岸の方を掘って湧く水をのんだ。透明度も五メートル程あっただろう。今の川では想像もできないだろう。今のうちに下水処理をしないと、遠からず「ドブ」川になってしまうであろう。

釣について

一、鮎釣り



れられない、今でも竿師が作った竹竿を三本持っているが、最近のカーボン竿など問題にならない。

その頃の鮎

は、二百グラム、二百グラム、三百グラムのが、たくさんいた。大きいのを「羽子板」と呼んでいた。

(1) 友釣り

竿は山から切ってきた竹を火で油抜きして使っていた。その頃の竹の感覚は忘

残念ながら今の小丸川では、友釣りをする場所もなくなったので、宝の持ち腐れとなった。竹竿だと微妙なあたりが手に伝わって来る。みち糸は三、四号の本テグスを使ったが、鮎が大きいので、よく切られた。仕掛けは今と変わらない。鼻かんを鼻に通し、尾びれの方に三本のいかり針をたらすのである。

(2) 引き掛け釣り

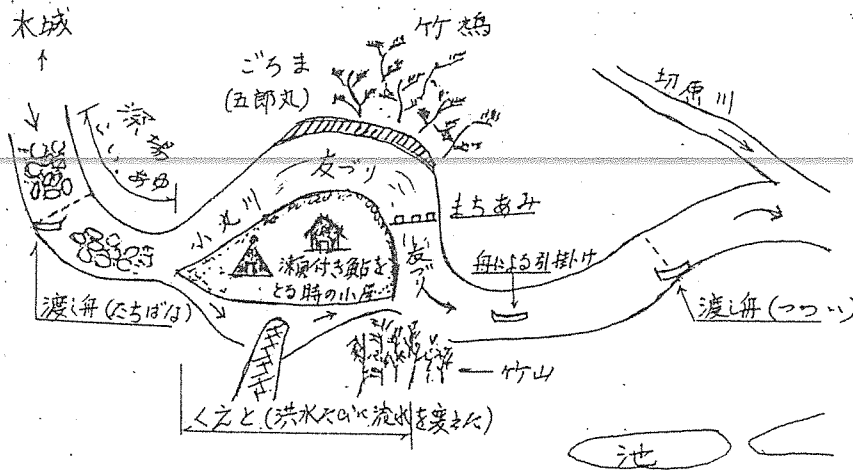
箱眼鏡で直接鮎を見つけて、竹竿の先きに付けた仕掛けで引き掛けるのである。(町資料館に保存) これには、二通りの方法がある。

その一は、川舟のうしろの方に腹ばいになって、箱眼鏡で覗きながら鮎を見付けて、四、五メートルの青竹の先の仕掛けで引掛けるのである。これは可成りの技術が必要であった。

その二は、瀬を流れながら眼鏡で鮎をみつけて引き掛けるのである。竿も三メートル程の短いも

のを使い、主に子供や若い人がやっていた。

(3) チョップン（ころがし）



今は、六月の解禁時から行っていて、一日に五十匹も百匹も獲っていて、大きなままに捕ってしまうので、大きな鮎が少なくなった原因でもある。当時は、小さいのは取ろうとしなかったし、

そんな「こめつ」（小さい）を捕ってとしかられたもんだ。大きくなって捕ろうという意識が強かった。瀬付きの頃になると、瀬の近くに藁と竹で組んだ五、六人は入れる丸い小屋を作り、真中で炭を焼き、まわりに藁をひきつめに、村人の憩いの場所でもあり、コミニケーションの場でもあった。釣り人だけでなく、友人や知人が集まり鮎を焼いて食べたり、焼酎を飲んだりしていた。

(4) ドブ釣り（毛針釣り）

四国から毛針を取り寄せ、長い竿で釣った。

(5) やな（まちあみ）

瀬の上を、竹で川をせき、網をすけるところを開き、竹で組んで座る場所を作り、鮎の下のを待っているのである。だから待ち網という。これは主として老人が多かった。

(6) 投げ網

網は、ほとんど自分で編んだ。そうして舟の上

から打った。また夜中に雨が降り出すと、網目の小さい投網を持って川岸に集まった小魚を捕りに出かけた。今は片手投げが主体であるが、その頃は見たこともなかった。

二、うなぎ捕り

(1) うなぎかごつけ

今行われているのと同じで、細長い(直径六、七センチ)丸いかごにミミズをいれ、夕方つけに行き、朝早く上げに行く。うなぎが入っていると重い手応えと中で暴れる感覚が忘れられず、眠いのを我慢してとんで行ったものだ。

(2) はいなわつけ

三十メートル程の太めの糸に、二メートルおきに四十センチほどの枝針をつけ、餌をつけて、夕方川に張っておくと、うなぎがつれた。今のようにつっぽんやなまずは釣れなかった。川が汚れたためだろう。

小丸川改修前の思い出

川田 中村 博

小丸川の歴史を、たどれば限りなく、いろいろな伝説や昔話を聞いている。何時の時代であったか判らないが、小丸川の流れた水路跡が地名となり、或いは、字名に残っていることから。小丸川も相当に蛇行していたことが想像出来る。

私共は大正末期からである。その頃と、現在の水路は大差ないが、川床が今に比べて、二、三メートル、所によっては四メートル位は高かっただろう。又、堤防らしきものが、集落の付近に点在しているだけで、全くの自然河川であったので、大洪水の時は広い範囲に、はんらんをし、又は、水に囲まれて孤立状態になった地区も四地区あった。

殊に上江地区に入っては、平野部となり、標高

も低いので、洪水の時は、川田、馬場原下から、対岸の元の下、坂本までの川幅が一キロメートル余りにもなり、松の木のコずえが点々と見えるだけで、一面、濁流であった。水面は波しぶきで霞とうとうと流れるさまは実にものすごかった。

安蔵地区より、はらんした水は、川田、馬場原下から高鍋西小の運動場を流れて、小丸、宮越下に抜けた。其の間には、水田や畑が洗堀されて大きな池となって、昭和の中頃まで存在した。川田の下に「サンダダ」（三反田）ん池、その少し下に広瀬ん池、その下に馬場原の池、今の中川原地区に「ゴタンブ」（五反歩）ん池、他にも方々に多くの池があって現在残っている池もある。それ等の池は皆、明治以前の遺物であったと推察される。

子供の頃は、そうした池で、友達と水泳や魚釣り等をしたり、洪水後には大きな流木が残されて

いたので、舟代わりにして池を一周する等して遊んだ。大人達は筏を組み投網打ちをしていた。小



丸川は九州でも三大急流河川の中に入り、平水時は、水の換りが早いということだろうか、とても清流であった。

野良仕事に行つて、家から持参したお茶がなくなると、本川に行つて水を汲んでこいといわれて、竹の筒を下げて行つたものだった。

川には、鮎、えび、ハゼ、ボラ等が多くいて、土用の丑の日には、近くの爺さん、婆さん達が孫を連れて、ハゼ釣りに出かけて、丑の日を凌がれたものである。

川田の上流、安蔵地区より小丸出口付近に至る間は、広大なる河川敷として、草原、松林、竹やぶが多く、ほとんどが荒地であった。小丸出口で「カーブ」して現在の堤防に突き当たる道路と、左岸の方は、坂本坂の登口付近より川の方へ直線道路が、左岸堤防に突き当たる線が、旧国道で、その両岸を結ぶ木橋小丸橋があり、橋長も百メートル余りあっただろう。右岸地区の旧国道沿いの広い草原で、十一月には、牛馬の競市があり、出店等がたくさん出て、大変にぎやかであった。旧国道を越えて上流には、仮設競馬場があったが、永くは続かなかった。

昭和二年頃には、安蔵地区より、高鍋西中北側

付近まで、約六百メートル位の堤内が出来、これに平行して広谷用水が創設されて、堤防には、約二十ヘクタールの水田と、住宅が点々と出来るようになり、昭和二十三年頃一級河川に編入され、昭和二十五年から建設省による、本格的な改修が始められ今日に至っている。

中国縦断作戦は苦労の限界

荻江 河野 愛二

前段Ⅱこの手記は、丁度今から五十年前、私の戦争体験を全く記録なしの、記憶のみを頼りに記したものである。地名等については、現在の中国地図を見ながら、記憶を呼びおこしながら、當時を想い出し少しでも私が、戦争に参加している当時の気持ちとして記し、一年数カ月に亘る中国縦

断南下作戦が何であったのかを回顧したものである。七十四年の私の多難な人生の重要な一駒であったことには相違ない。

この中国縦断作戦に参加された人は多い。しかし手記として記録しておられる方に、お会いしたことがない。私個人としては、あまり戦争のことは書きたくない気持ちがある。それは侵略戦争に加担したという、後ろめたいものがあるからだ。しかし手記として残すなら、事実が事実として、修正すべきは修正して、本当のものを残したい。事実反する、或いは、地名等に誤りがあるなら御教示願いたいと思っている。

蓑江の松寿会会長の柿原さんに頼まれて、私の戦争体験として書いておくのも、また、何かの御縁ではないのか、そんな気持ちで苦手な筆をとった次第である。

今回ここに、記録として残しておこうと考えた。

所詮、中国縦断南下作戦は、私が獣医務下士官として配属になった。歩兵第二二五部隊という、歩兵聯隊の、一輸送駄馬小隊のことであり、北支方面軍第三十七師団が南下して、シンガポール方面に進駐するという、終局の目的とは全く無関係な歩兵の兵隊達が、或いは、中国人苦力を、或いは、馬夫を雇って夢遊病者のように、唯歩いて南下していた。兵士たちの記録にしたいと思っている。

この南下作戦は、昭和十九年の春頃にはじまった。黄河の渡河作戦からである。一箇中隊が全滅するような激しい戦闘が、毎日繰り返されたのである。少人数ではあったが、一箇分隊位の決死隊が編成され、帰ってこなかった兵士隊の顔を、今でも夢に見ることがある。

この地点が、今中国地図を見ながら考え、記憶をたどっているが、どうしても思い出せないでいる。何れにしても、とてつもない広い中国のこと

であるから、詳細な地図でも手には入ったとき改めて、考察して見ようと思っている。

黄河は地図で見ると、上流はゴミの砂漠に端を発した。数万キロの長さをもつ、揚子江に次ぐ大きな河と聞いている。その黄河渡河作戦が終わって縦断南下大部隊移動が始まったのである。この頃の中国にも米軍爆撃機が毎日のよう飛来し、我々の行軍を徹底的に脅かしたのである。そうだったことで、昼間の行動は、全くできない。夕方薄暗くなって出発。大体一日の行程が、二十五キロから三十キロ、それでもときには、四十キロメートル位歩く日が連続してあり、そんな時は、徹夜の行軍になることがある。四十キロの行軍といたら、特に駄馬部隊は、十時間はかかる。夕方六時頃に出ても朝の四時になる。時には夜が明けることさえある。一晩中歩くと歩兵の兵隊さん達は、夜半頃から「小休止」ボタン、倒れて、

グーグー……。駄馬部隊はそうはいかない、装備はなるべく馬に積んで軽装であるが、「小休止」、重たい荷を馬から下ろす。水をさがして水を飲まず。馬の点検、荷物点検をする。中国人の苦力^{クワリ}を、馬夫を、寝るどころではない。煙草に火を付けた頃に、「出発」の命令が下る。

寝てしまつて、おいていかれ殺された兵隊も多くいる。行方不明として取り扱われ、そして次の戦場で戦死に格上げされたものと思われる。

昼間は民家を無断借用して、宿泊する。米機が飛来するので、馬まで家の中に入れる。兵隊の食糧も、馬の飼料もみんな、自給自足である。自給自足とは、民間の貯えたものを失敬することである。食糧がどこでもあるのではない。必ず裏山、倉庫、地下壕等に隠してあるのである。それを兵隊は必ず見つけてくる。部隊は毎日毎日歩いたのではない。時には休息のために二、三日滞在する

ことがある。この場合の滞在地は必ず、裕福な村である。全部隊がそうとは言わないが、そのような行動がとれる時期、（十月頃の米の収穫期）が、選ばれて南下作戦が展開されたのである。

今の武漢に七月頃到着したような気がする。

毎日が暑くてうだるような日々だった。中国では一番暑い街であると聞いたことがある。昔の武漢三鎮と言ったところだと思う。揚子江の河口にある上海から、千キロも上流にあるのに揚子江の対岸がかすんで見えない程に、河幅の広いのにビックリした。それから長沙近くを通り、衡陽^{ホンヤン}、桂林の近くを通り、毎日毎日の行軍が続いたのである。黄河を渡って、揚子江を渡ったのは、もう夏で桂林の近くに來た頃はもう秋で、稲の刈り入れが初まっていた。

桂林は非常に中国らしい。中国の墨絵にある。山・湖などの風景が、その儘絵のようにうつくし

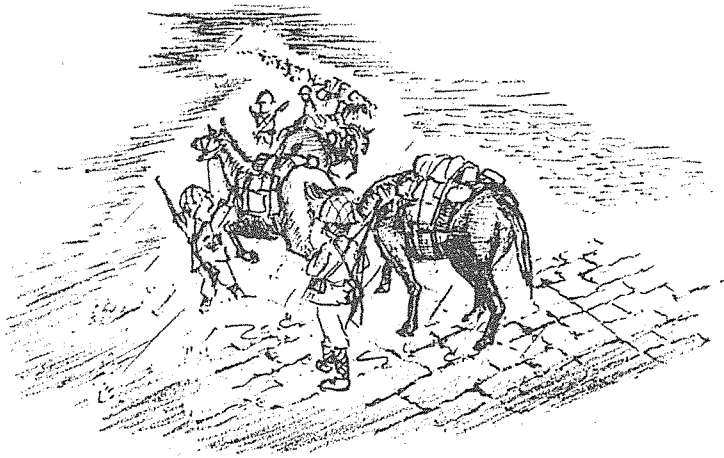
いところである。山はなだらかな山はなく、岩山で直立している。丁度この直立した山を眺めているとき、アメリカの爆撃機が飛んできた、私は木陰に逃げた。日本の戦闘機が一機飛行場から飛び上がった。直立した山の間を縫うようにして、米機とは反対の方向に逃げて行った。戦争も終わりに近づいたなと思った。

雨期は兵隊にとっては苦勞の種、時に駄馬部隊にとっては、この南下作戦では、死を意味するといつて言い位過酷なものであった。中国の街の道路は殆どが石畳みになっている。駄馬部隊はこの石の道路に來ると極端に緊張する。蹄鉄が非常にすべり易いのである。

ガタ、ガタツとする度に荷くづれを起こす。馬が倒れたら、最低十分はかかる。荷物を下ろし馬を起こして、また荷物を積んで前の部隊に追いつかなくてはならない。石のない道ならまだ、泥土

の道、これまた兵隊にとっては大変なこと、とても口では言えない過酷な、行軍であったが、とても想像もつかないのではなからうか？「除州・除州と人馬は進む」あの歌のとおり苦勞を想い出す。

兵隊の殆どが、どこへ行くのか知らない。毎日毎日を、唯命令の儘歩くだけ、止まって考えることは、何処に今日の行程を無事消化するか、明日のことはない。歩けなくなったら死ぬだけ、仕方がないから、死にものぐ



るいでついて行く、しかし死に対する恐怖はない。本当は楽な死に方があれば、「死んだ方がましだ。」と思っているのだろう。若い兵隊は死ぬことの恐ろしさより、上官、古兵のハッパの方がこわい。

中国地図を見て歩いたそれらしい街、都市を探して見た。黄河を渡って、国境の鎮南関迄少なくとも、三千キロメートルは歩いている。今のベトナム、当時の佛領印度支那は、汽車に乗った区間も若干あり、カンボジア・タイと昭和二十年八月十五日は終戦を迎えるまで、歩き続けた。私達の戦争は何だったのだろう。今さら戦死していった戦友達の冥福を祈らざるを得ない。

駄馬部隊Ⅱ(馬の背中に荷物を乗せ輸送する部隊)

輜重隊、弾薬、食糧等を輸送する部隊、支那(中国)との戦争では中国の馬を徴発し中国人を苦勞(クラーリー)行者

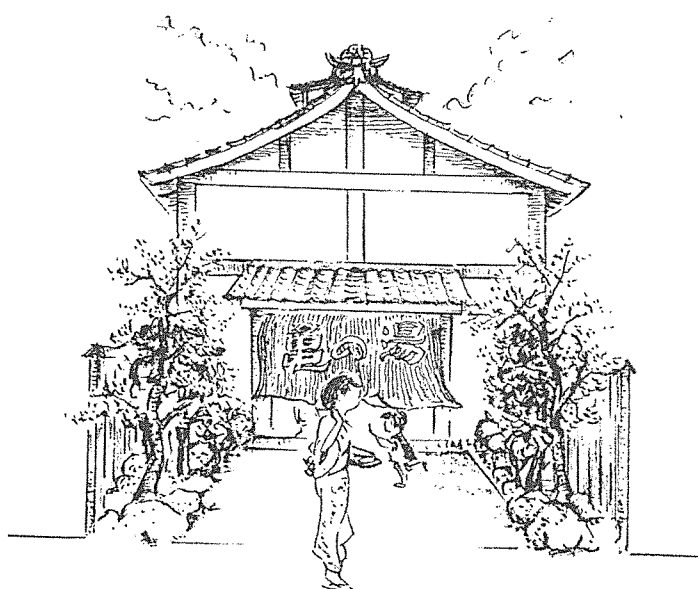
として使用した。

御苦労さま「亀の湯」

黒谷 尾崎 テツ

大阪で平凡な会社勤めをしていた私達夫婦は、あの戦後の混乱した都市生活に耐えきれずとうとう私は病氣になりました、暗い毎日でございました。主人はこの際思い切って、高鍋に帰り、療養に専念して父と共に生活し親孝行の真似でもしてみたいと言いつ出したのです。私もついに折れ未練を残しながら二十三年五月帰って参りました。昭和十年から始めていた家業の亀の湯は戦後の資材不足で営業は思うようにならず月にわづか十日、三日に一日の営業しかできない状態でした。営業中の浴場を覗いて見るとお湯は少なし、浴客は多

勢なため、実に非衛生で、たっぷりしたお湯につかって戴く事は到底望めない状態でした。当時は



どこの家庭でも殆どが風呂がなく隣近所で貰い風呂するとか銭湯を利用するのが普通の状態でした
(浴室が

あっても燃料がなかった) 帰りまして先ず第一に考えたことは何より営業日を増やすこと、ゆっくりのびのびと、お湯に浸っていただくことで、そ